第3回サマースクール報告

【1 月目】

2017 年度の GHC サマークスクールはベルリンの中心市街地にある re:work (International Research Center, Work and Human Lifecycle in Global History, Humboldt University in Berlin)の会議室で開催された。9月4日の初日は、今回の主催者であるフンボルト大学のAndreas Eckert 教授が、これまでに開催された GHC サマースクール (第1回は東京大学と北海道大学、第2回はプリンストン大学) を紹介し、今回のサマースクール全体の流れを説明するところからスタートした。

今回のディスカッション・セッションは、参加大学院生が事前に互いの論文を 読んでおき、サマースクールでは、5分で自分の研究について発表し、続いて担 当のディスカッサント参加者から 10 分ほどコメントし、その後全員での 45 分 のディスカッションで議論を深める流れとなっている。初日の午前のセッショ ンの二つの発表は、「ミュージアム」と「アート」がメイン・テーマで、ベルリ ン自由大学の Sebastian Conrad 教授がモデレーターを務めた。寺田悠紀氏(東 京大学)の"The Establishment and Evolution of Museums in Iran"と題し た論文は、イランのミュージアムの創立と変貌、とりわけミュージアムによる ナショナル・アイデンティティの創出について論じた。参加者とシニアメンバ 一の間で、イスラーム体制設立以前と以後のミュージアム事情と理解の相違、 イランを超えた世界規模での概念や制度の移動・交流について質問とコメント が交わされた。潘夢斐氏(東京大学)の"The Meiji 'Art' that Crossed Boundaries: A Study of Asahi Gyokuzan's Life and Works"は、日本の工芸 家・旭玉山の人生と作品に焦点を当て、明治美術・工芸の越境性を紐解き、参 加者から「アート」と「クラフト」の間の境界線やマイクロ・ストーリーの展 開のグローバル・ヒストリーの文脈への組み込み方といった点について議論が 繰り広げられた。

午後のセッションのテーマは「経済」に移り、羽田正教授(東京大学)の司会の下、2つの発表・ディスカッションが行われた。Rob Konkel 氏(プリンストン 大 学)の 論 文 "Creating a Global Economy: (Un-)Cooperative Internationalism, Technocratic Global Capitalism, and the Making of the Modern World, 1919-1939"は国際連盟(League of Nations)傘下の「The Economic and Financial Organization」が如何に戦時中のジュネーブで「グローバル経

済」を作り上げたかについて考察した。フロアからは、概念の明確化と単語の選択(例: "global economy "か" world economy "か)の重要性が提起された。続いて Christoph Plath 氏(ベルリン自由大学)の論文、"Reframing Human Rights: Collective Rights, the New Economic Order and the Legacy of Third-Worldism"は、今までの歴史研究の中で研究対象としてそれほど取り上げられることのなかった「人権」についてグローバルな視点から考察したものである。会場では「集団的人権(collective human rights)」と「基本的人権(basic human rights)」などについてさらに議論された。

この日の4つの論文に関する討議を通じて、いくつかの課題が共有された。羽田正教授が世界史という視点からいかに「National (ism)・Internatinal (ism)」ヘアプローチできるかという問題を提起し、Jeremy Adelman 教授(プリンストン大学)がマイクロ・マクロのレベル、また国境や文化圏を超えた研究のスケールについて見解を述べた。Alessandro Stanziani 教授(EHESS)は、カテゴリや概念の定義、また言語の間の翻訳の難しさについて論じた。

論文セッションの後、参加者全員が Holocaust Memorial のツアーに参加した。 Holocaust Memorial の学芸員によって、記念碑の建設の経緯、インフォーメーションセンターでの展示企画、手法、また見学者の反応が紹介された。入場後すぐの壁に設置された事実を淡々と記すテキストと写真を見学者が時間をかけて読み、ホロコーストについての知識と関心を深めていること、また、実際の展示方針として、ヨーロッパ全域に散らばる強制収容所の分布というマクロと犠牲者の家族史というミクロの両面を組み合わされていることなどが、説明された。

(文責・潘夢斐)

【2 日目】

サマースクールの 2 日目は、2つのセッションと1つの討論セッションが行われた。第一のセッションは、Alessandro Stanziani 教授 EHESS がチェアとなり、東アジア思想史と公共圏論に関する二つ分野の異なる報告が行われた。最初の報告は、周 雨霏氏 (大阪大学) による"Imagining the Self with the Other's Voice: Karl August Wittfogel and East Asia (1926-1945)"であった。『オリエンタル・デスポティズム』(1957)の上梓、そして露骨な反共キャンペーンなどで世に知られているドイツ系アメリカ人社会科学者であるウィットフォーゲルが、なぜ戦前・戦時期の日本と中国で異様といえるほどの注目を集めたか

という問いから始め、ウ氏と東アジア知識人の人的繋がり、そして後者がウ氏著作を翻訳・出版・再文脈化した経緯が一次史料の分析に基づいて描き出された。Sebastian Conrad 教授からは、当ケース・スタディーがどのように近代以降日中両国における「アジア」の概念づくりにおいて位置付けられるべきかなどの質問がなされた他、フロアでは、ミクロな単位に注目したグローバル・ヒストリーが開く可能性などについて論じられた。

本セッション二つ目の報告は Susanne A. Schmidt 氏 (フンボルト大学) による "The Midlife Crisis, Gender, and Social Sciences in the United States, 1970-90"であった。社会学、精神分析そしてジェンダースタディなどの領域でなされた先行研究を踏まえつつ、氏は 70 年代から 90 年代にかけてアメリカ社会における「中年危機」をめぐる言説の形成と変遷を遡ることによって、社会科学者、医学者、社会評論家、ジャーナリストや社会運動家などいろんなエージェントを含めるアメリカの公共圏におけるライフサイクル及び生活様式に対する認識の移り変わりを解明しようとした。この報告ののち、フロアからはアメリカ以外の社会で見られる「中年危機」の言説が多数挙げられ、この研究をどうすればグローバル・ヒストリーの文脈に位置付けることができるかが議論された。

午後のセッションでは、近現代インドの思想史に関する二つの報告が行われた。司会は、Natasha Wheatley 助教授(プリンストン大学)が務めた。最初は Yorim Spoelder 氏(ベルリン自由大学)が"Staging the Nation Beyond the Raj: Visions of Greater India, the Discourse of Civilization and Nationalist Imagination (1905-1964)"というタイトルで報告を行なった。1926 年に創立された The Greater India Society とその周辺の知識人たちの言動を中心に、一次文献を手がかりにして、汎インド主義の起源と挫折の全貌を描き写す試みであった。特にタゴールの東アジア、東南アジアとの豊富な人的・知的ネットワーク、そしてオランダとフランスのインド学者たちによって掲げられていた汎インド的イデオロギーが如何にしてインド・ナションナリズムの言論空間に取り込まれるかについて、綿密な分析が見込まれることが特徴的である。質疑応答では、近現代インド思想に関する事実確認のほか、二十世紀前半における劇的な思想史的パラダイム転換、例えば歴史社会学、進化論、マルクス主義、地政学など、それぞれの消長が如何に研究対象とする言論空間に影を落としたかなどについて議論された。

次に、Disha Karnad Jani 氏 (プリンストン大学) が" "A People Gets the Kind

of Leader It Deserves": M. N. Roy and *The Problem of Freedom*" と題する報告を行なった。ラインハルト・コゼレックが提起した概念史 (Begriffsgeschichte)を分析枠組みにして、ロイの著書『自由という問題』 (1945)における「ファシズム」というヨーロッパの政治的状況のなかで生まれた概念が、インドの文脈でどのように再解釈されたかを検討するものであった。フロアからは唯一のテキストを手がかりにしては概念史の理論が成立し難いなどの指摘がなされ、最後に Andrea Eckert 教授がロイを始めとする越境する社会運動に身を投じる人物の伝説化という問題に言及した。

その日の最後となったセッションでは、Jeremy Adelman 教授)の論文 "What is Global History Now?" (Aeon, March 02 2017) をめぐって議論がなされた。その論文は、米国におけるトランプ現象、英国の EU 離脱、フランス国民戦線を始めとする世界各地で見られる反グローバル化感情の高まりのなかで、グローバル・ヒストリー研究の行方を問い直す作業であった。Adelman 教授は従来のグローバル・ヒストリーを名乗る歴史叙述は、エリート層に属する研究者と大衆との認識的なキャップを孕んでいること、そして、「西洋中心主義の超克」を掲げるグローバル・ヒストリーが実際、覇権を握る英語圏の特権的知識人の言説の再生産に過ぎないという問題を指摘した。フロアからは各国のグローバル・ヒストリー研究と一国史研究の現状についての事例が紹介された他、前者のような学際的な領域にチャレンジする若手研究者の就職難など現実的な課題が挙げられた。最後に、羽田正教授が英語圏以外の文化・社会的コンテクストのなかで語られるグローバル・ヒストリーにも視線を向けるべきだと述べ、グローバル・ヒストリー研究の多様性と可能性を示唆した。

(文責・周 雨霏)

【3月目】

サマースクール 3 日目は、午前に 1 つのセッションと、午後に Boros 美術館へのエクスカーションが行われた。午前のセッションでは、中島隆弘教授(東京大学)をチェアとして、経済史に関わる 2 つの報告が行われた。1 つ目の報告は、大久保翔平氏(東京大学)による "The Trade, Distribution and Consumption of South Asian Products in the Eighteenth Century Malay-Indonesian Archipelago" であった。この報告では、18世紀のマレー・インドネシア諸島を対象として、当時主な輸入品であった南アジア産の綿布・アヘンの貿易傾向と現地社会の動向を関連付けた研究の構想が述べられた。その後の議論では、アヘンの消費者や産地、品質、密輸といったことに質問が集中し、また、綿布と

アヘンのインパクトの違いやこの時期のアヘンを論じることの意味を考える必要があるとの指摘がなされた。

2つ目の報告では、Pablo Pryluka 氏(プリンストン大学)が"Consumption and Advertising: A Genealogy of Anti-Consumerism in Argentina from a Global Perspective"と題して、1970年代のアルゼンチンにおける脱消費主義 (anti-consumerism)の台頭がアルゼンチン国内における広告業界への反発から起きた一方で、その背景には知識人の国際的なネットワークと密接に関わった言論形成があったことを論じた。議論では、広告のみならず消費行動に影響を与える多様なメディアや要素の存在、生産部門や労働市場との関係を論じる必要が指摘されたほか、現時点ではグローバルな言論形成とアルゼンチン国内の言論形成の接続が希薄で受容の側面が強いという意見が出された。

(文責・大久保翔平)

この日はプログラム終了後、希望者はボロス・コレクションのガイドツアーに 参加する機会を得た。第二次世界大戦中に作られた防空壕の建物を、2003 年に アートコレクターであるクリスティアン・ボロス氏が購入し、コレクションの 現代アート作品を展示している。ギャラリーとして使用されている部分は五層 あり、屋上にはボロス氏がペントハウスを増築して暮らしているという。 防空壕は当時フリードリヒ・シュトラーセ駅が空爆された場合に利用客を収容 するために強制労働者たちによって建設された。1945 年にソ連赤軍に接収され 戦争捕虜の収容所として使われ、東ドイツ時代にはバナナなどを貯蔵するため の倉庫として、90年代以降はテクノクラブへと変容していった。天井の低い部 屋や、コンクリートの壁の傷跡や塗装から、当時の状況を思い描くことが出来 た。見学は予約制となっており、内部の写真撮影は禁止されていたが、ガイド の方が作品の詳しい解説をして下さった。コレクションは800点以上あり、展 示される作品は4年おきに入れ替る。Bunker #3 と名付けられた現在の展示に含 まれていたのは以下のアーティストの作品である。Martin Boyce, Andreas Eriksson, Guan Xiao, He Xiangyu, Uwe Henneken, Yngve Holen, Sergej Jensen, Daniel Josefsohn, Friedrich Kunath, Michel Majerus, Fabian Marti, Kris Martin, Justin Matherly, Paulo Nazareth, Peter Piller, Katja Novitskova, Pamela Rosenkranz, Avery Singer, Johannes Wohnseifer。消費社会のシステ ムに疑問を投げかける作品や、飛行機や車の無機質な物質と人間の移動をテー マにした作品など、現代世界に生きる私達が国籍を問わず共感できるものも多 かった。防空壕をアートギャラリーにするという斬新な発想や展示作品に込め られたメッセージが既存の考え方やシステムを覆すよう繰り返し訴える。一方 で、広告業で成功したボロス氏の富によって膨大な個人コレクションが形成さ

れているという事実があり、そこに多少の違和感を覚えた参加者も少なくなかった。ナチス時代の建造物を消し去るべきか、残すべきか、という問題はドイツで繰り返し議論されている。ボロス・コレクションは現代アートを通して「今」を考えるきっかけとなると同時に、過去の記憶についても思いめぐらすことのできる場所であり、有意義な時間となった。

(文責:寺田 悠紀)

【4 日目】

サマースクール4日目は、午前に1つのセッションが行われ、午後は自由時間であった。午前のセッションでは、Matthew Karp 助教授(プリンストン大学)がチェアとなり、帝国や主権、福祉国家に関連する3つの報告が行われた。1つ目の報告は、Devika Shankar 氏(プリンストン大学)が"Slippery Sovereignties: The Princely States of Malabar and the Development of British Cochin, 1800-1920"と題して、植民地支配下におけるコーチン藩王国とイギリス帝国の主権と境界について論じた。Skankar 氏によれば、湿地環境を要因としたコーチン港周辺の曖昧な境界設定とグローバルな貿易発展の下で、コーチン藩王国はコーチン港の近代化に際し限定的ながら主権を行使できたのであった。質疑応答では、コーチンの特殊性に焦点が当てられ、環境史と政治史の接続、藩王国と国民国家形成、藩王国と帝国、インド洋におけるマラバール出身の商人の活動等をめぐり、いかに広い文脈に研究を位置づけるかといった議論が繰り広げられた。

2 つ目の報告は Eléonore Chanlat-Bernard 氏 (EHESS) による "An Imperial History of Welfare between Britain and Colonial India (c. 1870s-1940s)" で、イギリス帝国の救貧と支配下のインドにおける飢饉救済における政策間のつながりが検討された。これまで国民国家か国際機関の枠組みで論じられることの多かった福祉国家の形成であるが、Chanlat-Bernard 氏は帝国を枠組みとして、インドの飢饉救済で培われた政策経験が本国の救貧法改革に影響を与えたことを政策決定者らの系譜と議論を追跡することによって論じた。その後の議論では、主に研究におけるインド人やインドの位置づけ、政策論争と政策実践における用語法、資本主義と労働運動、史料について質問が投げかけられた。また、福祉国家の成り立ちに関する研究史が蓄積されているなかで、今後どのようにイギリスとインドの結びつきを実証し、研究を進めていくか議論が深められた。

(文責・大久保翔平)

コーヒーブレイクの後は、Federico Del Giudice 氏 (EHESS) の "Migration, Labour and Welfare. The Case of the Italian Workforce in France During the Interwar Period" と題した修士論文を基にした論文について議論が行われた。大戦間のフランスにおけるイタリア人労働者の訴訟や要求に着目し、Del Giudice 氏は、こういった研究が国家史の限界を浮き彫りにすると強調した。ディスカッサントの Rob Konkel 氏はフランスの特殊性について言及しながら、研究を進めるにあたり、フランス史に貢献するのか、国際労働機関の発展または比較史的な立場からグローバルヒストリーを描くのか、今後の方向性について提言した。続いてフロアを交えて法律上のカテゴリー、イタリア人というカテゴリーをそれぞれどう扱うべきかについて等が討論された。

(文責:寺田 悠紀)

【5 日目】

最終日となる 9 月 8 日の午前中には、Yaruipam Muivah 氏 (EHESS) と Fabian Steininger 氏 (ベルリン自由大学)が発表した。Muivah 氏は論文"Servitude and Abolition in Colonial North-East India, 1881-1930"において、インド北東部における奴隷制度とその廃止について分析した。ディスカッサントのChristoph Plath 氏はこの事例が世界史においてどのような位置づけなのか等の疑問を投げかけた。フロアを交え、アフリカの奴隷制度との関係や自由や資本主義という概念との関連性、そして数ある先行研究を踏まえた上でインド北東部の事例を取り上げる意義が議論された。

続いてSteininger氏はオスマン朝における倫理について扱った博士論文の一部である"Mass Violence against Istanbul Armenians in August 1896"と題した章について論じた。Steininger氏は、集団的「怒り」という感情に着目し、1896年イスタンブールで起こったアルメニア人に対する暴力を読み解いた。ディスカッサントの寺田悠紀は、revolt、massacre、genocide、という語がトルコではどう使われているのか、集団の感情や行動と個人の関係性についてコメントした。フロアからは論文や記事の書き方についても具体的な質問や指摘が挙がった。

午後は、シニアメンバーを中心に、National Narratives of Global Integration と題したラウンドテーブル形式のディスカッションが行われた。最初に、Matthew Karp 助教授は南北戦争と主に北米における歴史を紹介した。民主主義、

資本主義、自由や平等という概念についても言及した。続いて羽田正教授は日本における歴史認識と叙述の変遷を説明し、「東洋史」という分野が生まれた背景、戦前と戦後日本の歴史観の違いなどを紹介した。次に、Alessandro Stanziani教授はソ連の歴史、そして Natasha Wheatley 助教授はオーストリア=ハンガリー帝国の歴史を事例として、それぞれの特色を論じた。これらの発表を受けてSebastian Conrad 教授は、国家史には特殊性と世界全体に共通する普遍性が両方備わっていると主張した。また、統合(integration)について考える上で考慮すべき要素として、外部との関わりの中で国家史が描かれる際に生まれる劣等感を挙げた。最後にフロアを交え、国家史を踏まえた、もしくは超えた文脈で世界史を叙述する方法、そして今後研究成果をどのような形で発表することが相応しいのか議論された。

プログラムの終了後、参加者にはベルリンの主催者からサマースクール修了証が授与され、5日間に及ぶ発表と討論が幕を閉じた。GHC サマースクールは今年で3回目の開催となる。毎年参加しているシニアメンバーや今回2回目となる参加者も数名いたため、それぞれの経験を活かしサマースクールのプログラムを円滑に進行することが出来たと感じる。ジュニアメンバーも今後オンラインベースで議論を続け、交流を続けていく予定である。

(文責:寺田 悠紀)

【6 日目】

最終日はポツダムへのエクスカーションが行われた。希望者が集まり、ベルリン・フリードリヒ・シュトラーセ駅から電車に乗り、午前は近世から現代までの代表的な建築やストリートを 2 時間ほどかけて回った。特に印象的であったのが、ポツダムの都市計画においてナチス関連の遺物や東ドイツ時代の建築をいかに現代に保存・継承・改築していくのかということに対して強いこだわりがあるということであった。おりしも当日は、市内で右翼系団体のデモとそれに対抗する左翼系団体のデモが行われており、戦後ドイツの歩んでいる複雑な歴史的背景を垣間見ることとなった。

昼食後は、希望者を募ってさらにエクスカーションが続いた。まず、オランダ 人移民が建設に携わったというオランダ地区を通過し、新庭園地区の広大な庭 園を散策した。その中で、かのポツダム宣言(1945年)が発せられたツェツィ ーリエンホーフ宮殿を訪れ、40分ほどの博物館ガイドツアーに参加した。近世 史に取り組む身からすると、どうしてもサンスーシ宮殿やシノワズリといった ことに目が向きがちであるが、現代史をどう認識するのかということに対して ドイツが並々ならぬ取り組みを行っているということを改めて理解することが できた。翻って、日本の現状と比較してみると多くのことを考えさせられる。

最後に冷戦下で米ソ間のスパイ交換が行われたグリーニッケ橋を訪れ、その後、電車でベルリンへの帰路についた。エクスカーションの参加者は、仲間たちと再会を約し、思い思いに別れの言葉を交わした。短くも長かったサマースクールで培われた経験を各々が今後の研究活動に生かしてくであろうことに疑いはなく、今後の活躍が楽しみである。

(文責・大久保翔平)